

「生きがい」とは何か —中山間地域の課題としての「生きがいづくり」再考—

吹野 卓*・片岡 佳美**

What Is “the Meaning of Life”? : Reconsideration of “the Creation of the Meaning of Life” as a Policy Issue in Hilly and Mountainous Areas

Takashi FUKINO & Yoshimi KATAOKA

キーワード：生きがい，夫婦，コンヴォイ，中山間地域

1. 問題の所在

高度経済成長期以降の急速な工業化・都市化により，中山間（農山村）地域では，人口の過疎化や高齢化が進んだ。近年では，これまで中山間地域の人びとの生活を支えてきた集落が，生産のみならず互助や環境保全に対する機能も果たせなくなることへの不安，すなわち「限界集落」を懸念する声も大きくなっている。

そこで問題とされているのは，たんに葬儀や草刈りなどといった集落機能の衰退だけではない。人びとのウェルビーイングという視点からは，そうした行き詰まりの状況が精神面にもたらす弊害として，「生きがい」の喪失が問題視されている。そして，個人個人の生きがい喪失が，地域社会の衰退を一層進めていくことが懸念されている。よって，国や地方自治体では，生きがい創出のための政策に力が入られることになる。たとえば，政府

が過疎問題懇談会での議論をもとに2004年に発表した『今後の過疎対策について（後期5カ年計画の推進に向けて）』では，従来の「安全・安心な暮らしづくり」というナショナル・ミニマム的な視点に加え，住民主体の「生きがいづくり」をいかに支援するかが課題だと述べられている（総務省自治行政局過疎対策室2008）。

ところで，筆者らは以前，「あなたが思う『生きがい』とは何ですか」という問いに対する自由回答を分析し，生きがいが「個人的な楽しみ」や「自己実現」のほかに「社会的な存在価値」という点からも語られることを見いだした（吹野・片岡2006）。生きがいが，他者との共生の中で自己の存在が認められることと関連して語られていることが示唆されたのである。

他者との関わりが生きがいにとって必要とされるのなら，集落機能の低下により集落が「単なる居住社会」（笠松2001）となり，人び

* 島根大学法文学部教授（fukino@soc.shimane-u.ac.jp）

** 島根大学法文学部准教授（kataoka@soc.shimane-u.ac.jp）

とのつながりが希薄になってきている今日の中山間地域では、その意味でも確かに「生きがい」が問題となりそうだ。

こうしたことをふまえ、本稿では、身近で親密な他者としての夫や妻が、中山間地域に暮らすそれぞれの個人の生きがいにどのように影響するかという問題について考えてみたい。夫婦という視点からの分析を通して、生きがいとは何かについて、新たな見解を示すことをねらいとする。分析にあたっては、2006年12月に島根県雲南市で行なった質問紙調査の結果を用いる。

2. 先行研究

生きがいは、中山間地域に限って問題になっているわけではない。それはいまや、現代社会を生きる人びとにとって共通の問題となっている。

近代化により、個としての自己について、人びとの意識が高まったということは、社会学ではほとんど定説となっているが、今日のような情報化社会では、自己やアイデンティティに対する人びとの関心はさらに高まっていく。生き方の選択肢がさまざまに示され、壽里茂が言うように、「自分の人生にどう形をつけるか」がつねに問われるようになるからである（壽里1996）。こうして人びとは、自分らしい生き方を追求し、生きがい探しに駆り立てられていくと考えられる。

ただし、このように個人の生き方の問題として生きがいが注目されるとしても、生きがい探しの答えは自分の中だけで自己完結的に得られるものではないことを示唆する議論もある。たとえば、ハンナ・アーレントは、人間が人間として生きていくうえで、その人が「何者であるか」、つまり正体（他人とは違う、唯一性）を暴露することが重要だと考える。

そしてそれは「活動」を通じてこそ可能となるという。アーレントによれば、活動とは、異なる立場から物事を見聞きする他者との言葉や行為のやりとりにおいて生じるものであり、したがってそれは、人びとが自分自身を人間世界の中に挿入することを指す（Arendt 1958=1994）。このような考えからは、生きがいをもつことと、他者と関わって活動することは非常に密接な関連があるということが示唆される。

個人化の動きが加速する現代社会について論じたウルリッヒ・ベックらも、他者との対話や共生を強調している。ベックらは、自分らしい生き方や個人の自由にこだわる現代人にとって必要なのは、合意に固執せず異論が存在したままの状況も許容しつつ、他者の多様な生き方を尊重しあうことだと述べる（Beck & Beck-Gernsheim 2001）。つまり、他者が主張する「自分らしい生き方」や「人生」を積極的に認めていかなければならないということである。そのためには、他者との対話が必要となり、また、そうした対話こそが他者との共生や共同参画の基礎となるだろう。

これらの議論からは、生きがいをもつことに関心のある個人にとって、積極的に他者と対話し共同参画（活動）することは非常に重要であるということが示唆される。前述のように、筆者らも「生きがい」が他者との関わりという点から語られることを見いだしているが、生きがいある人生のためには「他者と活動すること」がカギとなるようである。

とすれば、夫や妻といった、身近で親密な他者と共同で営まれる家族生活は、上で見たような意味での活動の場となり、人びとの生きがいに重要な影響を及ぼしている可能性が考えられる。そして、そうした可能性については、近年、家族という集団を必要とする人

びとが増加していることから予想される。統計数理研究所の調査では、「あなたにとって一番大切なもの」として「家族」と答える人の割合が、1963年では13%、83年では31%、そして2003年では45%と増えてきていることが示されている（内閣府2007）。2003年の結果では、「生命・健康・自分」は21%、「金・財産」は5%、「仕事・信用」は2%となっていることから、家族への関心がとくに高まっていることが分かる。個人への関心が強まる一方で、家族という集団（義務や責任を伴い、個人の自由と対立することもありうる）を必要とする声が大きくなっているのである。こうした結果は、家族が、個人の自由な生き方を犠牲にするものとしてよりはむしろ、個人にとって関心のある「生きがい」のために必要な「活動」の場としてとくに重視されていることを示しているのかもしれない。

ところで、過疎化・高齢化が進む中山間地域では、個人にとっての家族生活の意味は都市部とはまた異なる可能性も考えられる。筆者らは、中山間地域でのインタビュー調査の結果から、個人にとって家族集団が農村部での暮らしに適応するための手段として認識され、それが家族集団のまとまりを維持する動機づけになっていることを見いだした（片岡2007；片岡・吹野2007）。このような中山間地域独特の事情も、生きがいをもつことと家族生活との関係に何らかの影響を及ぼすと思われる。

以下では、こうした点について、調査データに基づいて考察する。そのための手続きとして、①生きがいとして選択される項目の傾向について分析し、②夫婦間での生きがいの共有についての認識と①でみた傾向との関係を調べる。これらの分析を通して、身近で親密な他者（“重要な他者”や“第一次集団”と

も言われる）としての夫や妻が、人びとの生きがいにどのような影響をもたらすのか、とりわけ過疎化・高齢化で人びとのつながりが次第に希薄になっている中山間地域では、生きがいと夫婦（家族生活）の関係がどのように現れてくるのかについて検討したい。

3. データ

冒頭において述べたように、本稿では、2006年に島根県雲南市で行なった質問紙調査のデータを用いて分析を行なう¹⁾。

雲南市は、旧大東・加茂・木次・三刀屋・掛合町・吉田村の6町村が2004年に合併し発足した市であり、島根県中山間地域活性化基本条例（1999年3月制定）で中山間地域として指定されている。過疎・高齢化が進んでおり、2005年の国勢調査データによれば、人口は1995年に比べ3,845人減少して44,403人となっている。また、65歳人口が総人口に占める割合が31.4%と、年少人口（0～14歳）の割合13.0%を大きく上回っている。

質問紙は、この市に居住する20歳以上の男女2,000人を選挙人名簿からランダム・サンプリングで抽出し、郵送で配票・回収した。有効回収票数は1,079票、有効回収率は54.0%であった。

回答者の属性を概観しておくと、平均年齢は男性で58.42歳（SD=16.54）、女性で61.02歳（SD=17.31）である。現在配偶者のいる回答者は男性で81.3%、女性で77.9%、配偶者と離死別した回答者は男性で5.9%、女性で16.2%である。農業地域または山間地に居住する者（回答者の自己申告による）は、回答者のうち73.9%を占める。また、農業、畜産業、酪農業のいずれかを主たる職業にしたことのある回答者は、31.9%にのぼる。

4. 分析

4.1. 「生きがい」とされるものの傾向

今回の調査では、生きがいの有無について、「しっかり持っている」「なんとなく持っている」「ほとんど持っていない」「まったく持っていない」という回答選択肢を用いて尋ねている。それは、「自分は生きがいを持っている」とどのくらい強く言い切れるかを問う質問として見なせるだろう。

回答の比率を順にみると、「しっかり」は男性で25.7%、女性で28.7%、「なんとなく」は男性で57.6%、女性で53.8%であった。一方で「ほとんど」は男性で14.7%、女性で14.8%、「まったく」は男性で2.0%、女性で2.7%であった。男女とも、生きがいをもっていると回答した割合は、8割ほどにも達する。

生きがいを「しっかり持っている」「なんとなく持っている」と回答した人々には、「あなたにとって生きがいとは何ですか（複数回答可）」という質問にも答えてもらっている。質問紙で提示した回答選択肢は、表1の「生きがい項目」の欄に挙げた14項目と「その他」である。これらの項目は、2005年の調査データに基づいて筆者らが行なった自由回答分析（吹野・片岡2006）を参考にして選択されたものである。

表1には各項目の選択者数と、どれか1つにでも回答した者を母数とした選択率を示してある。項目は選択者数が多い順に並べてあり、「家族」「健康」「趣味」…の順で多い。とくに「家族」は72.7%もの人が、「生きがい」として選択していた。同様の傾向は2005年調査のデータでも認められており、筆者らはその分析で、「これが、生産性や効率性の面で不利な土地柄上、一般に「生きがい」として考えら

表1 生きがい項目の選択者数（複数回答n=715）

生きがい項目	選択者数	選択率
家族	520	72.7%
健康	414	57.9%
趣味	389	54.4%
人との交流	332	46.4%
仕事	271	37.9%
農作業	165	23.1%
夢や目標	162	22.7%
社会貢献	144	20.1%
自分の成長	107	15.0%
信仰	71	9.9%
他者の喜び	68	9.5%
過去の思い出	67	9.4%
貯蓄	62	8.7%
社会的評価	37	5.2%

れていることがらを達成するのがより困難な中山間地域だからこそみられる現象なのかどうかは分からない。ただ、能動的で強い個を前面に出すことなく生きる意義を考える人びとが、そこに多くみられるということは言えるだろう」（吹野・片岡2006：24）と述べた。表1では、このようなことをあらためて確認したと言ってもよいだろう。

表1に示した14項目の「生きがい」選択肢について、数量化3類で整理してみた。その結果抽出された2つの軸のカテゴリースコアについてそれぞれ高いものから順に記したのが表2である。すなわち、各軸として示した順序で項目を並べたときに、近い順位となる項目同士は同時に選択している回答者が多かったと言え、そこから各軸上で隣接する項目は何らかの意味で類似していると判断できる。なお、そのような並び軸は複数抽出することができるが、ここでは軸の重要性を示すサンプルスコアとの相関係数の高い方から2つの軸について示している（第1軸 $r=.50$ 、第2軸 $r=.46$ ）。

表2 数量化3類による生きがい項目のカテゴリースコア

第1軸		第2軸	
信仰	2.817	社会的評価	2.759
社会的評価	2.816	自分の成長	2.315
他者の喜び	2.625	他者の喜び	1.263
自分の成長	1.765	仕事	1.026
過去の思い出	1.577	夢や目標	0.955
貯蓄	1.173	趣味	0.536
社会貢献	0.566	社会貢献	0.307
夢や目標	0.288	家族	-0.308
人との交流	0.133	人との交流	-0.353
農作業	-0.157	貯蓄	-0.492
健康	-0.174	健康	-0.675
家族	-0.507	農作業	-1.478
仕事	-0.792	過去の思い出	-1.699
趣味	-1.148	信仰	-2.486

さて、これら2つの軸はどう読めるのだろうか。第1軸は、「信仰」「社会的評価」「他者の喜び」といった抽象性の高いものから、「趣味」「仕事」「家族」といった具体的な対象への並び順になっていると理解できそうである。

一方、第2軸は「社会的評価」「自分の成長」「他者の喜び」「仕事」「夢や目標」といった順で高い点となっている。これらは前向きで積極的に何かをしようとする「生きがい」であるように思われる。またこの第2軸で低い点となっているのは「信仰」「過去の思い出」「農作業」「健康」などであり、自己の存在の確認を「生きがい」としているものと言えそうである。

以上をまとめると、第1軸は<抽象-具体>、第2軸は<すること-在ること>と読むことが可能であろう。

これらの2つの軸のカテゴリースコアを平面上にプロットしたのが図1である。なお図では、カテゴリースコアに基づくクラスター分析の結果としてまとまった項目を曲線で囲ってある。

図1に示された各生きがい項目のまとめ方は、それなりに納得のいくものではないかと思われる。ではどのような世代、性別の人たちがどのような項目を「生きがい」としているのだろうか。

図2は、性別・年齢層別のサンプルスコア平均点をプロットしたものである。なお、ある回答者のサンプルスコアとは、その回答者が選択している項目のカテゴリースコアの合計を選択した項目数で割った値である。したがって、たとえば<抽象-具体>軸のサンプルスコアが高い回答者は「信仰」「社会的評価」「他者の喜び」などの抽象性が高い項目を選択している傾向があるといえる。

この図では、20歳代から80歳代まで10歳刻みに区分した回答者の平均値の違いを、男性は点線で、女性を実線で示している。これを見ると、年齢が高くなるにつれて右下から左上へ、すなわち「具体的」かつ「すること」に関する生きがい項目から、「抽象的」かつ「在ること」に関する生きがい項目へと変化していると言える。また、女性の方が「在ること

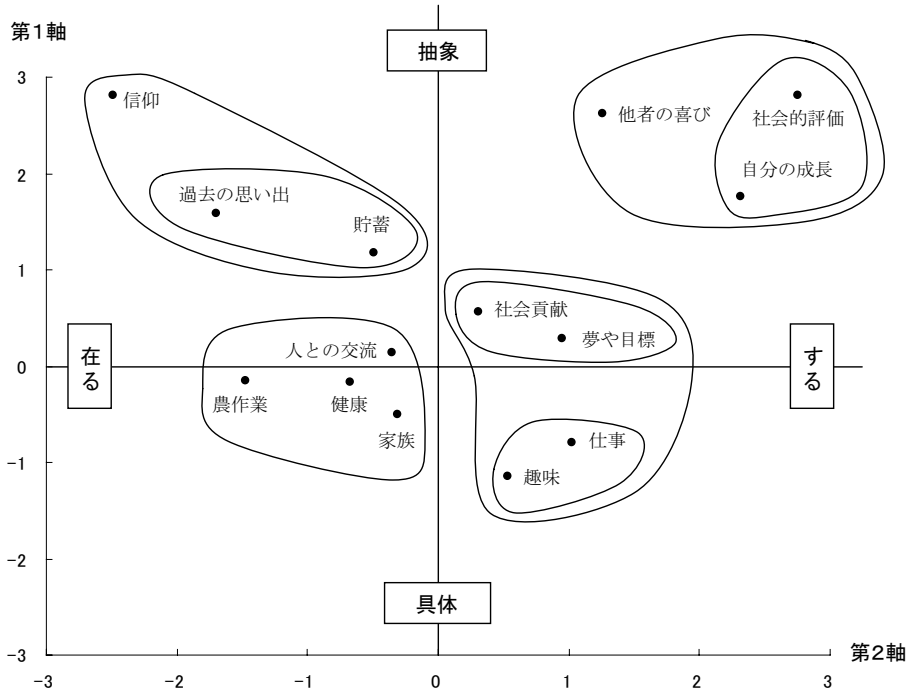


図1 カテゴリースコアを用いた生きがい項目のマッピング

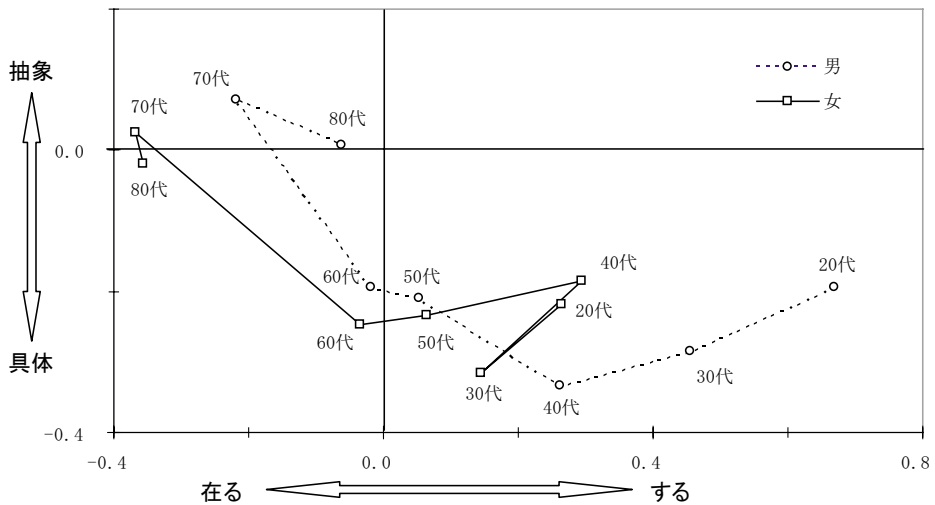


図2 数量化3類のカテゴリースコアの性別・年齢層別平均値

と」を生きがいとする傾向があり、その傾向は若年層（20～30歳代）と高齢層（70～80歳代）で顕著である。

生きがいにとって重要と考えられている「活動」とは、通常、「すること」を意味してお

り、そして実際に「する」ためには「具体的」な行為が伴うと考えられるものである。女性よりも男性、高齢層よりも若年層で、具体的かつ「すること」に関連することがらに生きがいを見いだす傾向がみられたことは、こう

した積極的な活動へのアクセシビリティが性や年齢に影響されることを示唆している。つまり、それは、働き盛りの男性にとって接近しやすいものである。その意味では、活動的な生きがいは、産業主義的な価値観と関連していると考えられる。

では、「生きがいつくり」や「生きがい探し」は、産業社会での第一線から排除されがちな女性や高齢層においてとくに問題となるのであろうか。そうとも言い切れないであろう。女性や高齢層では、活動的な生きがいはあまり強調されないが、抽象的かつ「在ること」を特徴とすることがらに生きがいを見いだしているからである。確かに、そのような非活動的なことがらは、産業主義的な社会で周辺に追いやられた人たちの諦めや妥協、あるいは克服や達観の結果、生きがいとして意義が見いだされるようになるのかもしれない。しかし、そのような見方自体が産業主義的な価値からの見方に過ぎないのかもしれない。

4.2. 生きがいの傾向と夫婦での共有認識

さて、今回の調査では、生きがいがあると回答した人（配偶者のいる人）に、夫婦間でその生きがいを「共有している」「共有していない」「分からない」のいずれであるか尋ねている。前節で示した生きがい項目に関する2つの分類軸（＜抽象－具体＞と＜すること－在ること＞）は、この夫婦間での生きがい共有認識と関係していた。各項目（n=14）のカテゴリースコアと、その項目を選択した人びとの「共有率」「非共有率」「不明率」との相関係数を示したのが表3である。

表3から、抽象性が高い生きがい項目を選択している人は、夫婦間で生きがいを共有していると回答する傾向があると言える。また、「すること」に関する活動的な生きがい項目を

表3 カテゴリースコアと夫婦間の生きがい共有についての相関

	第1軸 抽象性	第2軸 すること
共有率	.79**	.25
非共有率	-.64*	-.50
不明率	-.24	.67**

** : p<.01 * : p<.05

選択している人は、夫婦間で生きがいを共有しているかどうか不明であると回答する傾向があると言える。

これについては、どのように読みとることができるだろうか。先行研究において、生きがいある人生にとっては「他者との活動」がカギとなることが示唆されていたことをふまえると、夫や妻のような身近で親密な他者と「共同」で「具体的な何かをすること（つまり、活動すること）」こそ生きがいとされる傾向がみられるはずである。

しかし、今回の結果は、そうした傾向を必ずしも示さなかった。積極的な活動に結びつきやすい具体的なことがらを生きがいとするのは、むしろ「夫婦で生きがいを共有していない」という人たちであり、抽象的な観念を生きがいとするほど、夫婦で生きがいを共有していると認識される傾向がみられた。

そして、実際に何かを「すること」に生きがいを見いだす人たちは、夫婦間で生きがいを共有しているかどうか「分からない」と答えていた。つまり、相手が自分と同じ方向を向いているのか（あるいは、同じものを見て向き合っているのか）どうかは分からないということである。

このことが示唆するのは、夫婦が共同参画して何か具体的なことをすることは、個人の生きがいある人生にとってさほど重要でないということである。それよりも、抽象的なこ

とがらについて二人の共感や一心同体性が強調されるとき、生きがいが実感されることもあると思われる。

4.3. 活動的でない生きがい

人びとにとって生きがいは、活動的なものに限らず、抽象的で「在ること」として捉えられることもある。また、生きがいは、身近で親密な他者である夫や妻と共同参画して何かをすることにおいて実感されるとは必ずしも言えず、より静的で抽象的なイメージを夫婦で共有しあっていると認識されるときに実感されている。このようなことが明らかになった今、ここで問題にしている生きがいは何かについて、あらためて吟味する必要があるだろう。

そこで、「自分は生きがいを持っている」とどのくらい強く言い切れるかを尋ねた質問にもう一度注目する。それぞれの回答選択肢に1~4点の得点を与え（得点が高いほど強く言い切れるとする）、これを「生きがいを持っている」と言い切れる度合いをみるための尺度とし、それと今の暮らしに関する5つの評価項目との間の関係を調べた。今の暮らしに関する項目とは、「自分ばかり損している」「何を目標に生きていけばいいかわからない」「毎日を無駄に過ごしている」「さみしい」「全体として満足している」で、回答選択肢は5段階尺度の形式である。それぞれ肯定的な回答ほど得点が高くなるように1~5点の得点を与えた。相関係数を表4に示す。

表4からは、生きがいを持っていない人は、自分が損して、目的がなく、寂しく、満足していない傾向、すなわち暮らしに対する評価が低い傾向があることがわかる。さて、この結果から「生きがいが無いから、暮らしに対する評価が低い」と言うのは現実感覚として無理があるのではなからうか。むしろ、「暮らしに対する評価が低いから、生きがいが無いと答えている」と読むべきだと筆者らは考える。すなわち、「生きがい」は、その人の置かれた状況の影響を受けて形成されていくものと思われる。

考えれば、「生きがい」というものは客観的事実としては存在していない。他者から、あるいは自分自身から「何が生きがいなのか」と問われることによって、人は初めて自分の「生きがい」は何なのだろうという回答を探し始め、その回答がまさにその人の「生きがい」に他ならない。「生きがい」とはこのように高度に主観的な構成物なのではあるまいか。

むろん、「生きがいは何々である」、あるいは「生きがいがない」という回答を自分自身で得ることは、自己をそのようなものとして規定していくことを意味する。したがって、「生きがい」がその人の置かれた状況の認識に影響を与えていくことも確かではあろう。ただし、上述のように、日々の生活の状況がその人の「生きがい」の持ち方に影響を及ぼすという因果関係の方向がまず存在していると思われる。

このように考えれば、活動的ではないもの、

表4 生きがいを持っていると言い切れる度合いと、今の暮らしについての評価の相関

	自分ばかり損	目的不明	毎日を無駄	さみしい	全体として満足
	-.15**	-.46**	-.37**	-.31**	.35**
n	834	842	840	844	858

** : p<.01 * : p<.05

より抽象的で観念的なものに生きがいを見いだすということも何ら不思議ではない。生きがいは、自分自身がこうであるという確信から生ずる構築物であり、その意味で、必ずしも活動的なものとは限らないからである。

では、そうした活動的でないことがらを夫婦で共有し、そこに生きがいを見いだすということについては、どのように解釈できるだろうか。

これについては、D.W.プラス (Plath 1980 =1985) の「道づれ (コンヴォイ)」という概念が参考になる。コンヴォイとは、その人との長期的な関わりを通して自己の持続的なイメージ (「一人の人間として独自の存在であること」の確信、とも言い換えられるだろう) が保存され累積されていく、という存在である。結婚している人にとっては、夫や妻は、コンヴォイとしてとくに大きな意味を持っていると思われる。

客観的で具体的な活動に比べると、目に見えない抽象的なものはより主観的に解釈されるため、他者と共有しているという感覚を生じやすい。そのようなものを夫婦で共有していると認識することにより、コンヴォイとしての夫や妻と一体化することができる。それは、「私が相手を失えばさみしいように、相手も私がいなければさみしいに違いない」という確信につながっていく。そして、その確信から、自己の独自性 (アーレント的に言えば、その人の正体) についての感覚が生じるのではないか。その感覚とは、存在意義の実感であり、まさに生きがいの実感である。

もちろん、他者と積極的に共同参画することにおいて実感される生きがいもありうる (ただし、その他者とは、夫や妻以外の人である可能性が高い)。活動と生きがいの関係そのものが否定されるわけではない。あるいは、こ

こで筆者らは、「活動」の意味をもっと広義に捉えるべきだと提案してもよい。すなわち、コンヴォイを意識した自省作用も活動のうちを含めてもよいと考える。いずれにしても、ここで示したのは、具体的に何かを起こすこと以外の生きがいもあるということである。要するに、人びとは生きがいについて問われるとき、「かけがえのない私」をどういうときに実感するかについて考えるのである。

5. 結語

本稿の目的は、人びとの生きがいに、夫や妻といった身近で親密な他者がどのように影響するかについて考察することにあった。そのための手続きとして、人びとが語る生きがいの傾向について分析し、その傾向が夫婦間で生きがいを共有しているという認識とどのように関わっているかについて分析した。それぞれの分析は、他者との活動の中から生きがいが生まれてくるという仮定のもとでなされたが、結果として、その仮定自体を見直す必要に迫られた。

生きがいとは、人から問われてはじめてその答えが追求されるものである。というのは、それは、かけがえのない独自の存在としての自己についての気づきをどのような場面で経験するか、反省して見つけられるものだからである。したがって、それは他者との共同参画を通して実感される場合もあるし、また違った状況で実感される場合もある。本稿で示したことは、後者のケース、すなわち、抽象的で「在ること」に関わることがらを夫婦で共有しあうときに見いだされる生きがいの存在である。他者との関わりは生きがいにとって重要だが、それは必ずしも具体的で積極的な活動というかたちをとらなくてもよい。それを説明するさいに、本稿では、コンヴォイと

いう概念を用いた。人生の大半を共に過ごす夫や妻は、コンヴォイとなって、個人の自尊心の醸成に貢献する。

こうした知見が得られたのは、今回分析に用いたデータが、中山間地域の住民を対象とする調査データであったことに起因するのかもしれない。過疎化・高齢化が進む中山間地域は、産業主義的な見地からは、決して恵まれた状況にないと言える。働き盛りの男性と違って、女性や高齢者では抽象的で「在ること」に生きがいが見いだされていたことをふまえれば、中山間地域の人びとは、都市部の人びとに比べ、活動的な生きがいを追求しにくいとも考えられる。今回の分析では、そのような中山間地域の特徴が現れていたのかもしれない。

しかしいずれにせよ、過疎対策として取り組まれている「生きがいづくり」支援施策については、新たな視点で見直すことが必要となると言えよう。具体的な何かをすることはわかりが「生きがい」ではないのである。

【注】

1) 本調査は、科学研究費補助金若手研究(B)「農山漁村における家族ライフスタイルについての実証的研究」(研究代表者:片岡佳美・島根大学法文学部准教授)、および島根大学プロジェクト研究推進機構の重点研究部門「中山間地域における住民福祉の向上のための地域マネジメントシステムの構築—「健康」と「生きがい」の学際的分析を通じたアプローチ—」(研究代表者:伊藤勝久・島根大学生物資源科学部教授)の調査研究の一環として実施された。

【引用文献】

Arendt, H., 1958, *The Human Condition*, Uni-

versity of Chicago Press (志水速雄訳, 1994, 『人間の条件』, 筑摩書房).

Beck, U. and Beck-Gernsheim, E., 2001, *Individualization: Institutionalized individualism and its social and political consequences*, Sage Publications.

吹野卓・片岡佳美, 2006, 「語られた『生き甲斐』の構造—中山間地域調査における自由回答の数量的分析—」, 『島根大学法文学部紀要: 社会文化論集』3: 15-27.

笠松浩樹, 2001, 「集落に内在される世代間格差と今後の地域運営の在り方—島根県中山間地域における小規模・高齢化・縁辺集落からの考察—」, 『林業経済』635: 1-17.

片岡佳美, 2007, 「農村部における『家族の個人化』についての一考察—島根県中山間地域の事例研究—」, 『家族社会学研究』19(2): 32-44.

片岡佳美・吹野卓, 2007, 「農村家族における結合パターンに関する数量的分析—島根県中山間地域での調査データを用いて—」, 『島根大学法文学部紀要: 社会文化論集』4: 31-39.

内閣府, 2007, 『平成19年版国民生活白書』, 時事画報社.

Plath, D.W., 1980, *Long Engagement: Maturity in Modern Japan*, Stanford University Press (井上俊・杉野目康子訳, 1985, 『日本人の生き方』, 岩波書店).

壽里茂, 1996, 「ライフスタイルと社会構造」, 壽里茂・北澤裕・桜井洋編『ライフスタイルと社会構造』, 日本評論社: 1-26.

総務省自治行政局過疎対策室, 2008, 「新たな過疎対策について」

<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm> (2008年12月28日アクセス).